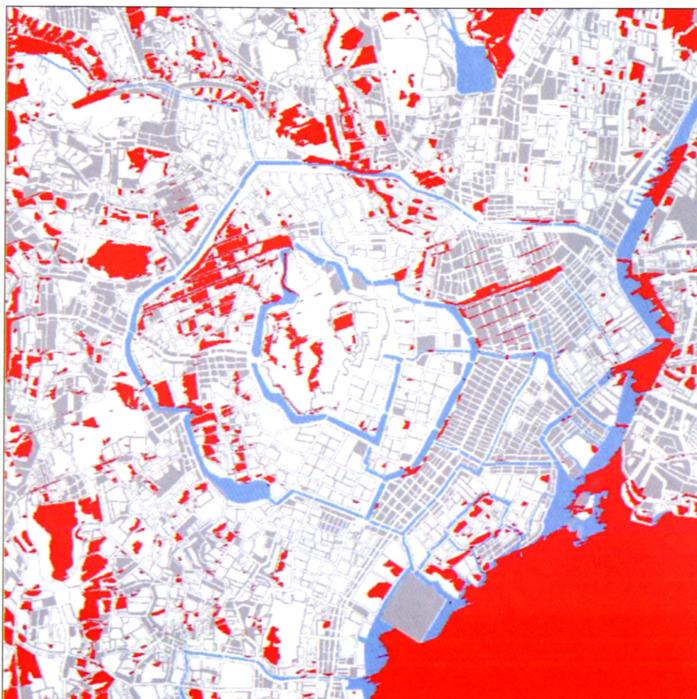


江戸・東京の「富士見」考

江戸の都市景観を再現する研究を始めて5年くらいになる。いろいろ目的はあるのだが、やはりその発端は好奇心である。広重が描いた、江戸の都市文化に富士山の眺望が見事に融合した景観、あの素晴らしい都市景観は本当に存在したのであろうか、という素朴な疑問から研究を始めた。

図 江戸市中からの富士山の眺望場所（天保御江戸絵図（1843年刊）をもとに著者らが作成）



研究はあまり進んでいないのだが、断片的には成果は出てきている。その一つが、江戸市中から富士山を眺望できた場所を大雑把にではあるが特定できしたことである。図にそれを示す。

赤色で示したところが富士山を地上から眺望できた場所である。江戸時代の絵図を現代の地図に合うように幾何補正し、明治中期の大縮尺地形図から標高を与え、さらに絵図から読みとった土地利用に対して史料を参考に建物の位置と高さを与えて導き出した。

この図を初めて見た時には驚いたし、本当に嬉しかった。山の手の台地や丘はもちろんあるが、これまで名所図会やその類の史料に示されていなかった富士見の視点場がたくさんあったのだ。広重が描いたように、日本橋北界隈の街路から富士を望めたり、隅田川の河畔、それどころか川面からも富士が見えたのである。広重の描いた江戸は本当なのかも知れない、と胸が高鳴った。

国土交通省の関東地方整備局がいま、「富士山を背景とした良好な眺望が得られる公共空間」として、「関東の富士見百景」を選定している。大変魅力的なイベントである。現在のところ、128景が選ばれているが、東京の山手線の内側に限ると、残念ながら2景しか選ばれていない。

そのうちの1景は、荒川区の日暮里富士見坂である。山手線内で富士山を地上から望むことのできる数少ない場所として以前から有名な坂であったのだが、数年前に隣の文京区に建てられた、たった1本のビルで富士山の左手稜線の眺望が失われた。これが原因なのかどうか分からぬが、今回の「富士見百景」の選定でも、目黒区や大田区、杉並区などにある他の「富士見坂」とともに「東京富士見坂」の景として一括されての選定となってしまった。

もう一つの景は、文京区の文京シビックセンター展望ラウンジからの富士山と新宿副都心を望む

景観である（写真）。残念ながら地上からの眺望ではないが、実に雄大で素晴らしい景観である。

山手線内には、東京タワーや六本木ヒルズの森タワーなど、富士見の展望地点は数多い。しかし、これらと違って、この展望ラウンジは入場無料である。このシビックセンタービル、文京区役所である。まさに公共空間なのである。

さて、この景観だが、何故素晴らしいかといえば、やはり新宿副都心と富士山の調和であろう。高層ビルのスカイラインの谷間に日本のシンボル、富士山が大きく聳え立つ姿。大都会東京が靈峰富士に敬意を表するかのように、その御座を創っているかのように見えるのである。

この景観の重要な要素は東京都庁である。富士の右手に屹立する有名な第一庁舎と、スカイラインの谷間にある階段状の比較的小さな第二庁舎である。もし、東京都の計画が違ったものであったなら、もし、丹下健三の設計が違ったものであったなら。このこと一つをとっても、この景観は偶然の所産である。日暮里の富士見坂と同じく、たった1本の超高層ビルによって失われる運命にある。わが国には、眺望景観を保全する法律はないし、東京都にはそのような目的の条例もない。

私は、自宅が近いこともあって、家族と一緒によくこの展望ラウンジに通うのであるが、江戸の景観再現の研究をやり始めてから、この景観をこれまで以上に大切に思うようになった。広重が描いた、そして江戸の人々がこよなく愛したであろう富士見の景観が、その有り様を変えて現代に蘇ったかのような、そんな喜びを感じるからである。もし、この景観を失うようなことがあれば、東京はその歴史から完全に逸脱し、そこにはもはや未来がないとさえ思える。そのくらい、私はこの景観をいとおしく思う。

先日、上田篤先生の『都市と日本人』（岩波新書）を読んでいて驚嘆した。ロンドンでは、郊外の幾つかの丘や、市内の代表的な場所からセント・ポ



写真 文京シビックセンター展望ラウンジからの富士山の眺望（関東地方整備局「関東の富士見百景」のホームページより）

ール寺院を望めるように建物の高さを規制しているのだそうだ。恥ずかしながら、私はこの事実を一切知らなかったのだが、それはさておき、ロンドンにできて東京にできないわけがない。

広重は、富士山だけでなく、江戸湾や筑波山を背景にした江戸の風情をたくさん描いている。山の手の地形と下町の水辺が織りなす美しい景観描写も広重の十八番であった。広重の絵を見ていると、東京という大都会は景観形成上、本来実に恵まれた大地に位置していることを実感する。

大自然が作り出した地形は、その都市の根源的な個性である。東京はこの個性を大切にし、これを活かした景観形成を行うべきである。いつの日か、東京は世界に冠たる美しい大都会に生まれ変わるだろう。これこそ、東京の再生である。



清水英範
東京大学 社会基盤学専攻 教授
(空間情報学、人文地理学)